

◇博物館だより◇

金沢蓄音器館

Kanazawa Phonograph Museum

〒920-0902 金沢市尾張町2丁目11番21号

HP: <http://www.city.kanazawa.ishikawa.jp/bunho/chikuonki>

TEL:076-232-3066

FAX:076-232-3079

1. 蓄音器のあゆみ

音は空気の振動であるといいますが、目に見えないだけにあまりピンときません。しかし、空気の振動を記録すれば、音を蘇らせることができるはず。発明王、トーマス・エジソンがシリンダーに錫箔を巻きつけ、録音再生の実験に成功したのは1877年のことです。空気の振動を記録する…。糸電話を思い出してください。自分がしゃべると口の前のパラフィン紙が震えます。その震えが糸を伝って相手方の耳元で同じように震えるので、音が聴こえるしくみです。エジソンは錫箔シリンダーに溝の深さを利用して振動を記録し、もう一度溝の凸凹をなぞることで、振動板を震わせ再生したわけです。

エジソンは、まもなく錫箔を蝋に変えます。当時は、音楽や娯楽のためというよりも、記録の道具として使われることが多く、遺言の録音や講義の記録、ユニークな使い方には、目覚まし時計のかわりに使われることもあったようです。蝋を使うことで、表面を削って録音を消去し、再録音もできるという長所もあり、通信の手段としては画期的な改良といえるでしょう。やがて音楽家たちが自分たちの演奏を録音するようになると、複製が難しい蝋管方式から、プレスによる複製が可能で大量生産できる平円盤式のものに改良されます。まだラジオがない時代ですから、レコードによって音楽を広めており、このころから娯楽としての使い方ははじまります。

しかし、皆さんがレコードとして思い浮かべる平円盤状にしたのは、発明を競い合っていたベル研究所のベルリナーでした。当然エジソンも平円盤状への変換に着手しますが、7ミリほどある分厚さで、振動方式も溝の深さを利用した縦方向のものでした。音質は相当良く、当時エジソンはその音質の良さを証明するためにある実験を行いました。それは、最初はステージ上で本物の歌手に蓄音器の横で歌わせ、歌が進むうちに照明を暗くして歌手を退席させ、あらためて照明を明るくしたステージ上には蓄音器からレコードの歌が流れていたといういわゆる「すりかえ実験」で、当時の人々をずいぶん驚かせたというエピソードも残っています。ただし分厚いので盤の原材料が多量必要なこと、高価であったことから売り上げは不振で、この機種を最後にエジソン社は蓄音器作りをやめてしまい、ベルリナー式によるレコードが普及します。

ベルリナーは溝を斜めに刻むことで、レコードを薄くする工夫をし、振動板は横方向に振動します。これを横振動と呼んで、蓄音器の分類は、ラップ付や箱型の見た目の形での区分けのほか、振動板の振動方向によっても分類しています。

アナログの時代からデジタルの時代への技術革新の歴史には、まさに目を見張るものがあります。しかし音を再生するという原理は、エジソンの発明した方法が基本となっており、

大きくは変わっていません。録音の歴史は、まだ130年しかないのです。



図1 大正ロマン風の外観

2. 蓄音器の特徴と魅力

「蓄音器は電気力なしでレコードをかけられます。」こう申し上げるとなすかされる方も、実際に再生してみせすと想像以上の大音量に驚かれる方も多いです。蓄音器のしくみは実は単純で、ハンドルを回すと中のゼンマイが巻かれます。縮まったゼンマイが戻ろうとする力を利用してレコード盤を廻しています。演奏の間、常にハンドルを回し続ける必要はありません。あとは針のついたサウンドボックスと呼ばれる振動板をレコードの溝に置くだけで再生できるのです。むしろその音量の大きさに「ボリュームは絞れないのですか」というご質問をいただくほどです。蓄音器によっては、ラップ部分にタンポンを押し込める機能がついているものや、扉がついているものは、その開閉によって音量を調節することができますものもありますが、基本的には音量は変えられません。溝の凸凹の大きさが音量や高低が決まります。そのほかの方法としては、針に大音用とか小音用と表示があるものもあって針の太さによって多少の効果がありますが、基本的には録音されたようにしか再生できません。また、針の材料を変えることで音色が変わるので、音量も多少違って聴こえます。バラやサボテンの棘や陶製のものでも代用できますし、竹製の針は特によく使われ、製品として存在します。竹針はすぐに先が磨り減ってしまいますから、1面ごとに先を鋭く切る必要があります。専用のカッターがあり、特殊な品物ですから、蓄音器とは別にコレクショナーがいるほどです。主には鉄製の針を使いますが、これも竹ほどではありませんが磨り減るので、まめに交換しなくてはなりません。針も減りますが、鉄の針で擦るのでレコードの溝もどンドン削り取ってしまいます。レコードはかけるたびに音質がわるくなってしまうの

です。とくに第2次大戦中から戦後まもなくはレコードの材質が極端に悪く、芯にしてある紙の板がむき出しになってしまうほどです。

最近になって、蓄音器をとおして聴く音には「安らぎ」や「癒し」といった効果があるとも言われており、そのあたたかみのある音色が改めて愛されはじめています。電気を使わないのも、今となってはスローライフにぴったりなエコロジーエンターテインメントとして魅力的ではないでしょうか。



図2 2階フロアの聴き比べコーナー

3. 金沢蓄音器館

金沢にはかつて製針工場があり、かなりのシェアがあったことはわかっていますが、蓄音器の工場があった記録はほとんどなく、とくに蓄音器が多い土地柄的理由はありませんが、戦前からレコード店を経営していた当館の初代館長が昭和50年ころから収集していたコレクションや喫茶店経営者のコレクションがあったことが知られています。そのうちの蓄音器やラジオ、初期のステレオなど540台とSP盤2万枚の山蓄コレクションをもとに、2001年7月に金沢蓄音器館が開館しました。開館以来、毎日3回、10台ほどの蓄音器で演奏する時間を設けています。エジソン社の蝋管式や縦振動式、蓄音器の王様ともいわれるクレデンザー、日本製のポータブル蓄音器などを一度に聴き比べできます。サロンでは月に数回テーマ別に鑑賞会を設け、じっくりとレコードを楽しむこともできます。実際にレコードをかけていますので、磨り減ってしまうのが悩みですが、蓄音器の本来の音色や、当時の音楽の楽しみ方を知っていただくために、あえて実演を行なっています。それを補うためにお客様に不用のSP盤の寄贈を呼びかけたところ、善意ある方々のおかげで6000枚ほど収蔵が増えました。稼動しないものは部品取りをさせていただくことが前提ですが、蓄音器の寄贈もお願いしており、収蔵が充実してきました。当館に類似機もなかった蝋管専用録音機や、国内でも数台しかないといわれていたオートチェンジャー付の大型蓄音器も寄贈いただいたことで、かねてから収蔵していた当館所蔵のオートチェンジャー機も鋭意修理をして、同時公開させていただきました。少しずつですが、全国に館の存在が周知され、寄贈の申し出をいただけるようになったことは、うれしいことです。

この秋、蓄音器とならんで20世紀前半に活躍したアメリカ製の自動再演ピアノが収蔵に加わりました。メイソン&ハムリ

ン・アンピコのグランドピアノ型でピアニストの指のタッチを記録した紙ロールを利用して演奏を再現するものです。ロールは1800本以上を所有し、ラフマニノフやガーシュインの自作自演の作品も豊富です。ピアノそのものが鳴っている音色は、生演奏と変わらない迫力で、蓄音器と同じく100年前にこんな贅沢な音楽の楽しみ方をしていたのかとうらやましくなる空間を作り上げています。

どうぞ、100年前のミュージック・ラグジュアリーを実感しにお越しください。



図3 自動再演ピアノのあるサロン

所在地	金沢市尾張町2丁目11番21号
電話	076-232-3066
入館料	一般 300円/65歳以上 200円 高校生以下 無料
開館時間	10:00~17:30(入館は17:00まで) 繁忙期には延長あり
実演	【蓄音器の聴き比べ実演】 毎日 11:00 14:00 16:00 【自動再演ピアノ定期実演】 毎週日曜日 10:30 13:30 15:30 * 団体の場合、上記以外でも事前にお申し出 下されば実演案内させていただきます。
休館日	年末年始(12月29日~1月3日) 展示替で休館の場合あり
駐車場	8台 http://www.city.kanazawa.ishikawa.jp/bunho/chikuonki e-mail:chikuonki@city.kanazawa.ishikawa.jp

(文責:安江貴子)